

2025 年度 人文社会学部 人間文化学科「学修行動アンケート」の分析

人間文化学科 学科長 大塚淳子

はじめに

2025 年度の本調査結果について、人間文化学科における特に 4 年生の回答結果に着目した成長実感・満足度についての分析を行った。ここでは人間文化学科の結果を取りまとめるが、各コースについて特性を反映した違いがあり、それらの詳細は各コースの分析を参照願いたい。以下、各コースについて、福祉コース=F コース、メディア文化コース=M コース、グローバルコミュニケーションコース=G コース、と表記する。

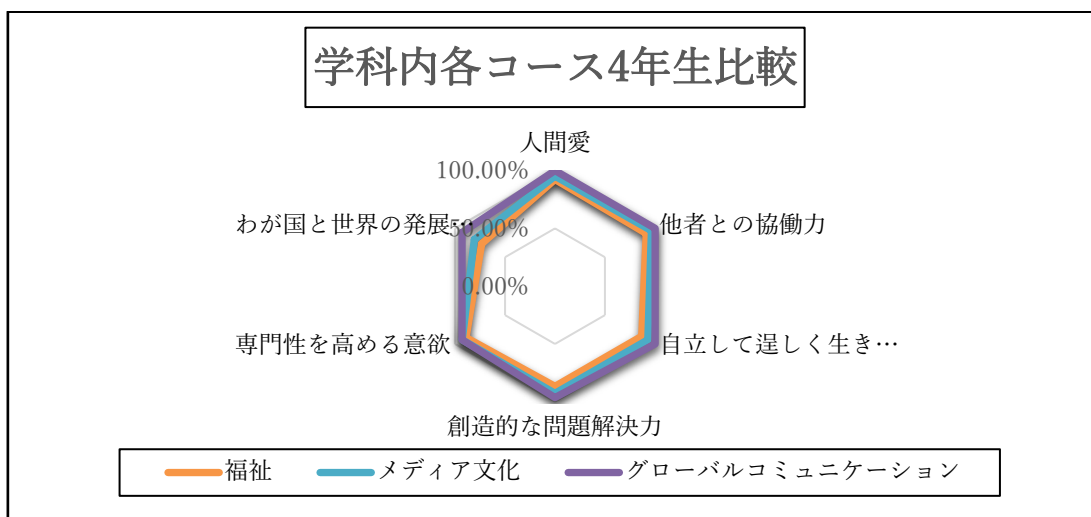
< 0. 回答率 >

本学科の在籍対象学生数 653 名のうち回答者数が 598 名、回答率は 91.6%（前年度 92.6%）、うち、F コースが 82.6%（91.6%）、M コースが 96.6%（94.8%）、G コースが 91.6%（88.8%）となっており、福祉コースの今年度回答率が学科全体の回答率を下げた。来年度は全コースで回答率向上を目指したい。

< 1. 「本学の目標とする力」がどの程度身についたか > 設問 1～6

「十分身についた」「かなり身についた」の合計割合をみる。大学全体との比較では全て上回っており、5 項目までは全て 90%以上であるが 6 項目目の国際的な観点の項目となると、大学全体よりは高いが、多項目と比べると低くなることわかる。

本学の目標とする力	大学全体	本学科 4 年生	F	M	G
人間愛	92.60%	95.40%	92.3%	95.2%	100%
他者との協働力	94.10%	95.50%	91.1%	96.3%	100%
自立して逞しく生きる力	91.40%	92.30%	86.7%	92.7%	100%
創造的な問題解決力	88.70%	91.60%	86.7%	92.7%	96.4%
専門性を高める意欲	91.60%	91.60%	88.9%	92.7%	92.9%
わが国と世界の発展に尽くす力	79.00%	80.70%	73.3%	80.5%	92.9%

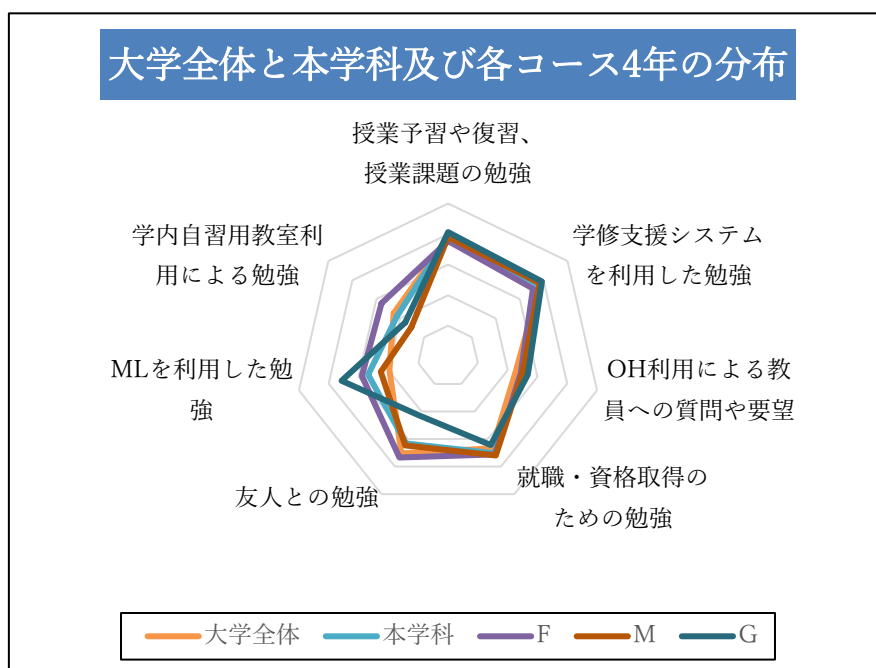


各コースの分布ををチャート図でみると大きな偏りは見られず同様の形状となる。

< 2. 授業関連について > 設問 7～13

ここでも「頻繁にした」「ときどきした」の2つの回答割合の合計値からみた。

	授業関連について	大学全体	本学科	F	M	G
7	授業予習や復習、授業課題の勉強	77.90%	78.00%	75.50%	78%	81.30%
8	学修支援システムを利用した勉強	77.20%	75.40%	71.10%	77%	78.60%
9	OH 利用による教員への質問や要望	45.40%	50.30%	48.90%	50%	53.50%
10	就職・資格取得のための勉強	66.60%	70.30%	71.10%	71.90%	64.30%
11	友人との勉強	70.40%	63.20%	73.40%	64.60%	42.90%
12	ML を利用した勉強	39.30%	53.60%	57.80%	45.10%	71.40%
13	学内自習用教室利用による勉強	45.30%	42.60%	55.60%	30.70%	35.70%



チャート図では、設問項目 11～13 でコース間の差異が見える。オフィスアワーを利用した教員への質問や要望項目は、福祉コースの 2 年生が 2 項目で 71.1%と高く、おそらく実習開始等に伴う指導や資格取得に関する進路相談が増えるからと推測された。

< 3. 授業期間中の生活行動に関する時間や回数について > 設問 14～18

4 年生になると、授業時間外に行った学修時間が全体的に短い傾向にあるのは、大学全体も本学科、各コースともに同様であった。一方、1 日当たり学内で過ごす時間については、学生各自の活動状況に応じた違いがあるようで、バラつきが見られた。大学全体では 5～6 時間が 30.8%で 1 位、6～7 時間が 28.4%で 2 位であるところ、本学科 4 年生では 3～4 時間が 18.7%と 1 位となっており、授業数もそう多くなく 1～2 コマの者が多いのではないかと考えられる。毎年、本調査で気になる設問 16「睡眠時間」については、大学全体で 4 時間未満が 9.7%に対し、本学科全体で 8.1%、4 年生は 5%と少なめだが、1 年生が 8.6%、2 年生が 12%とやや心配な割合である。また、例年同様に 1 週間あたりの読書時間に関しては、大学全体で 1 時間未満が 64.1%と低い、本学科合計も 1 時間未満が 48.5%、

4年生も49%と約半数が週に1時間も本を読まないことがわかる。知識や考え方、想像力、語彙を増やす意味でも、電子図書を含む読書の時間を増やす働きかけを考えたいところだ。

< 4. 授業期間中の活動状況等について > 設問 19～22

設問 19「授業の欠席」に関しては大学全体で「なし」「1回」併せ48.2%であるところ、本学科全体で28.9%、4年生で22.5%となっており、4年生はそれほど多くの授業を履修していない可能性があるが、しっかり出席していると言える。

一方で部活動やサークル活動は大学全体も「なし」「1回」が77.2%と活動状況の乏しさがうかがえる。本学科も全体で75%、4年生は85.2%である。但し、部活動やサークル活動は4年生になると引退年次でもあり、本設問は低学年の低さが気になるところである。相対するように設問 21 のアルバイト回数は、大学全体で3回以上が54.8%あり、本学科全体も55.8%、4年生で57.5%と半数を超える。これは、単位履修クリアが見通せてアルバイトに時間を割いているのか、学費や生活費等のためか等の背景は本調査では掴めない。

設問 22 は年間のボランティア活動回数を問うているが、大学全体で「なし」が76.2%であり、本学科も81.7%、4年生が76.8%と同様の結果である。今後の社会では、本学が目標に掲げる6つの力の中でも「人間愛（利他の力）」および「協働する力」「創造的な問題解決力」などは重要と考えられ、それらを養う機会としてボランティア活動の有効性は高い。「学チカ」として学生のボランティア活動を推奨していくのであれば、大学を挙げた取り組みや組織作りの検討も必要かもしれない。（※参考）

=====

<※参考>東京ボランティア・市民活動センターが2024年に行った『大学におけるボランティア活動支援に関する全国実態調査の報告書』（全国1106校の大学・短期大学のうち598件回収率54.1%）によれば「ボランティア活動を主たる業務として担当する部署がある」が13,2%79校、「他業務とともに、ボランティア活動を担当する部署がある」60,7%363校となっている。

< 5. 本学の設備や教育内容、学修支援について > 設問 23～35

どの設問においても「とても満足」「やや満足」を併せて、大学全体と同様に、本学科もまた4年生も高い割合で満足度がみられている。殆どの項目において「とても不満」「やや不満」を合わせたネガティブ回答の割合が大学全体より本学科あるいは本学科4年生が低い。唯一、設問 34「就職支援室による進路・就職に関する支援」で、大学全体のネガティブ回答2項目の計が8.7%であるが、本学科全体で8.8%、4年生で10.3%となっている。不満の内容が支援に関する不満なのか、就職活動の結果を受けてのことなのか、内容までは掴めないが、コース別にみると、F15.5%、M6.1%、G14.3%であり、FコースとGコースで支援への不満がやや高めとなっている。

< 6. 不安や悩みについて > 設問 36～43

この範囲は「大いにある」「少しある」とのネガティブ2回答の計につき割合をみる。設問 36「授業の内容についていけない」は大学全体で24%に対し、本学科で21.1%、4年生は11%であり、3年次までに本課題が解消されるよう対策の検討が求められる。

設問 37「卒業後にやりたいことがみつからない」は大学全体で30.8%に対し、本学科で

は 41.7%、4 年生は 31%となっている。4 年生で 30%強は就職活動との兼ね合いや社会人生活のスタートに際してやや案じられる。多様な仕事のイメージやリアリティを描けることやロールモデルを見つける機会の提供とその活用が増やせるとよいと考える。

設問 38「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」は、大学全体で 52.5%と半数越えに対し、本学科全体でも 58.8%、4 年生で 32.2%となっている。先の項目と併せて、就職、働くことのイメージ獲得不足や種々の不安が読み取れる。

設問 39「経済的に勉強を続けることが難しい」は大学全体が 12.6%に対し、本学科全体で 14.9%、4 年生で 12.9%とやや高い割合を示している。

設問 40「学内友人関係の悩み」は大学全体で 11.9%に対し本学科全体 13.9%、4 年生 8.3%であり、設問 41「家族関係の悩み」は大学全体で 7.8%に対し、本学科全体で 11.3%、4 年生が 14.9%である。本学科内で見ると低学年より 4 年生の割合が高く、進路面の選択等の影響なのか詳細は掴めないが、深刻な場合には相談できていることを願うしかない。

設問 42「身体面の健康状態への不安や悩み」では、大学全体が 18.4%に対し、本学科全体が 21.4%、4 年生が 22%と高くなっており、やや案じられる。さらに設問 42「精神面の健康状態への不安や悩み」は、大学全体で 19.7%に対し、本学科全体で 26.1%、4 年生が 29.6%と約 3 人に一人の割合で心配な状況である。しかし、設問 43「悩みの相談相手」をみると、学内外の友人や家族を相談相手とする割合が、大学全体で 76.8%、本学科全体で 73.5%、4 年生で 73.9%となっており、概ね相談相手を持っていることが分かる。相談する相手がいないは各 3.5%未満である。

< 7. デジタルツールに関して > 設問 45～50

設問 45「生成 AI 利用度」をみると大学全体が「頻繁に」「時々」合わせて 70.6%に対し、本学科全体で 74.1%、4 年生が 70.3%とほぼ同様に高い割合であり、その活用目的が設問 46で見ると「授業課題やレポート作成」で大学全体が 23.4%に対し本学科全体で 31%、4 年生で 30.6%となっている。また、4 年生は就職活動に 15.5%が利用しており大学全体の 8.4%と比べても高い。今後ますます利用が増えていくであろうが、懸念点は AI 出力結果の検証有無について「確認している」が大学全体も本学科も 4 年生も 45%前後と半数弱で、「確認していない」「あまり確認していない」合わせて 4 年生でも 14.9%となっていることである。また、授業課題やレポートの作成への活用状況を目前にしていると、自身で考えるというプロセスを全く放棄しているケースも散見され、思考力や言語化の力が育たないのではないかと案じることも多く、活用度増加に伴う今後の課題と考える。設問 49 と 50 を通してオープンバッジについては「知らない」者が多く、周知が課題と窺えた。

< 8. 学科独自の設問項目に関して > 設問 51～69

入学時との比較で能力の獲得を問う設問を多く設定した。4 年生の回答が「十分ついた」「かなりついた」の合計割合が 6 割を超えた項目は以下であった。設問 51「幅広い知識と教養」61.3%、設問 58「他の人と協力しながら物事を進める力」65.9%、設問 59「人とコミュニケーションする力」62%、設問 63「人の意見に耳を傾け共感する力」69%、設問 64「規則や約束を守る態度」65.8%、設問 65「学業と学外活動の両立等、自律的生活態度」61.3%。同様の項目の割合が 4 割未満となったのは、設問 52「本を読む習慣」33.8%、設

問 68「日頃から海外の人（留学生含む）と接する力」 34.9%、である。

学修に対する習慣、読解力、計画的学修、国際的関心の醸成などについては本学科の学生の学修課題であるが、人との交流や関係づくりについては一定の成果がみられている。

以上

2025 年度 福祉コース 学修行動と学修成果の調査結果分析データ（抄録）

全般的には、4 年生において多くの項目で肯定的な回答が高い水準にあり、特に「目標とする力」や「授業関連」「満足度」では、大学全体と同程度、またはそれを上回る項目が多くみられた。一方で、読書習慣、国際的な関心や交流、SDGs の意識、オープンバッジの認知・活用などについては、今後の教育課題として継続的に取り組む必要がある。

4 年生は、国家試験受験に向けた準備、就職活動、卒業研究、実習後の振り返りなど、学生一人ひとりが異なる課題に取り組む時期である。また、卒業後の進路も、専門職、一般企業、公務員、進学等、多岐にわたる。そのため、4 年次の教育支援においては、全員に共通する専門職養成の視点に加え、個々の進路や関心に応じた支援を行うことが重要である。さらに、3 年次以下の段階から、進路の多様性を前提としたカリキュラムやキャリア支援を検討し、他の福祉系大学との差別化を図っていく必要があると考える。

<項目 1 目標とする力>

4 年生において「十分身に付いた・やや身に付いた」と回答した割合は、「人間愛（利他の心）」約 93%、「他者と協働する力」約 91%、「自立して逞しく生きる力」約 87%、「創造的な問題解決能力」約 87%、「専門性を高める意欲と力」約 89%、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」約 73%であった。

多くの項目で高い水準を示しており、福祉コースでの学びを通じて、学生が人間理解、協働、専門性、問題解決に関する力を一定程度身に付けたと自己評価していることがうかがえる。特に、「人間愛（利他の心）」と「他者と協働する力」は 9 割を超えており、福祉を学ぶ上で重視される価値や姿勢が、4 年間の学修を通じて形成されている可能性がある。

一方、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」は約 73%であり、他の項目と比べるとやや低い。大学全体では約 79%であることから、福祉コースとしても、地域福祉、国際福祉、SDGs、多文化共生などを関連づけながら、福祉専門職として社会の持続的発展にどう関わるのかを意識できる教育内容をさらに充実させていく必要がある。

<項目 2 授業関連について>

4 年生の「頻繁にした・時々した」と回答した割合に着目した。

設問 7「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」に関して、4 年生の割合は約 76%であり、大学全体の約 78%をやや下回ったものの、3 年生の約 75%と同程度であった。卒業研究、国家試験対策、就職活動などが重なる時期であるが、授業関連の学修には一定程度取り組んでいると考えられる。

設問 8「学修支援システム（manaba）を利用した勉強」に関して、4 年生では約 71%であり、大学全体の約 77%を下回った。3 年生は約 78%であり、4 年生では manaba を用いた授業課題や連絡確認の機会が相対的に少なくなっている可能性がある。卒業研究、国家試験対策、就職支援等において、manaba をより積極的に活用する余地がある。

設問 9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」に関して、4 年生は約 49%であり、大学全体の約 45%を上回った。3 年生は約 42%であり、4 年生では教員との接点がやや増えていることがうかがえる。卒業研究、実習後の相談、国家試験、進路相談などを通じて、教員に相談する機会が増えている可能性がある。

設問 10「就職や資格取得に関わる勉強」に関して、4 年生は約 71%であり、大学全体の約 67%を上回った。4 年生において「頻繁にした」と回答した割合は約 47%であり、他学年より高い。国家試験受験や就職活動が本格化する時期であることから、進路に直結する学修への意識が高まっていると考えられる。

設問 11「友人と一緒に勉強」に関して、4 年生は約 73%であり、大学全体の約 70%をやや上回った。実習経験の共有、卒業研究、国家試験対策など、友人同士で支え合いながら学修する機会が一定程度あると考えられる。

設問 12「メディアライブラリーセンター（図書館）を利用した勉強」に関して、4 年生は約 58%であり、大学全体の約 58%と同程度であった。国家試験や卒業研究に向けて、図書館を学修の場として活用している学生が一定数存在する一方で、「全くしなかった」も約 22%であり、図書館利用の促進にはなお課題がある。

設問 13「学内の自習用教室等を利用した勉強」に関して、4 年生は約 56%であり、大学全体の約 45%を上回った。国家試験対策や卒業研究、就職活動に向けた準備の場として、学内の自習スペースが一定程度機能していると考えられる。

<項目 3 授業期間中の時間の使い方>

設問 14「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」は、4 年生では「1～2 時間」が約 29%で最も高く、次いで「2～3 時間」が約 24%、「1 時間未満」が約 22%であった。また、「4～5 時間」が約 9%、「5～6 時間」が約 4%、「6～7 時間」が約 2%であった。長時間学修の割合は高くないものの、2 時間以上学修する層も一定数存在しており、卒業研究や国家試験対策などに取り組んでいることがうかがえる。

設問 15「学内で過ごす時間」は、4 年生では「3～4 時間」が約 27%で最も高く、次いで「1～2 時間」が約 18%、「6～7 時間」が約 16%であった。3 年生では「4～5 時間」「5～6 時間」が高い割合を占めていることから、4 年生は授業数の減少や就職活動、卒業研究等により、学内滞在時間が多様化していると考えられる。

設問 16「睡眠時間」は、4 年生では「6～7 時間」が約 31%で最も高く、次いで「5～6 時間」が約 27%、「7～8 時間」および「4～5 時間」がそれぞれ約 18%であった。睡眠時間は比較的安定していると考えられるが、4～5 時間以下の学生も一定数存在しており、国家試験や就職活動の時期には生活リズムへの配慮も必要である。

設問 17「趣味や娯楽の時間」は、4 年生では「2～3 時間」が約 24%で最も高く、次いで「1～2 時間」が約 20%、「4～5 時間」が約 16%であった。学修や進路準備の合間に、一定の余暇時間を確保していると考えられる。

設問 18「本（電子書籍含む）を読んだ時間」は、4 年生では「1 時間未満」が約 60%で最も高く、次いで「1～2 時間」が約 18%であった。読書時間は全体的に短い傾向にあり、福祉専門職に求められる文献読解力や制度理解を深める上では、授業内外で文献に触れる機会を意図的に増やす必要がある。

<項目 4 授業欠席回数、部活・サークル活動、アルバイト、ボランティア>

設問 19「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数」は、4 年生では「3 回」が約 29%で最も高く、次いで「2 回」が約 24%、「4 回」が約 22%であった。大学全体に比べると欠席回数が多い傾向があり、就職活動や卒業研究、実習関連の活動など、授業外での予定が影響している可能性がある。ただし、出席状況は学修成果に直結するため、4 年次においても授業参加の意義を継続的に伝えていく必要がある。

設問 20「部活動やサークル活動を行った回数」は、4 年生では「なし」が約 84%であり、3 年生の約 81%よりもやや高かった。4 年生は就職活動や国家試験対策等により、部活動・サークル活動から離れる学生が多いと考えられる。

設問 21「アルバイトの回数」は、4 年生では「3 回」が約 27%で最も高く、次いで「なし」が約 22%、「2 回」が約 20%であった。この時期、就職活動や国家試験対策との両立が課題となるため、過度なアルバイトによる学修時間の圧迫には留意が必要である。

設問 22「ボランティア活動の回数」は、4 年生では「なし」が約 69%であり、大学全体の約 76%よりは低かった。福祉コースの学生として、ボランティアに参加している層は一定数存在するものの、全体としては活動機会が十分に広がっているとは言い難い。地域福祉、子ども家庭福祉、障害福祉、高齢者福祉などの学びと連動したボランティア機会を提示することで、学修と実践を結びつけることが期待される。

<項目 5 本学の設備や教育内容、学修支援>

「とても満足・やや満足」と回答した割合に着目した。

設問 23「授業の内容」について、4 年生は約 91%であり、大学全体の約 86%を上回った。授業内容に対する満足度は高く、4 年間の学修を通じて、専門科目や実習関連科目の意義を実感している可能性がある。

設問 24「所属する学科・コースのカリキュラム」について、4 年生は約 93%であり、大学全体の約 88%を上回った。福祉コースのカリキュラムに対する評価は高い。社会福祉士・精神保健福祉士等の資格取得を目指す学生に加え、一般企業や公務員等を目指す学生にも対応できるよう、専門性と進路の多様性を両立させたカリキュラムの充実が求められる。

設問 25「学生生活」について、4 年生は約 89%であり、大学全体の約 88%と同程度であった。卒業を控えた段階で、大学生活に一定の満足を感じている学生が多いと考えられる。

設問 26「講義教室の設備」について、4 年生は約 96%であり、大学全体の約 79%を大きく上回った。講義教室の設備に対する満足度は高く、学修環境として一定の評価を得ている。

設問 27「演習室や実習室の設備や器具」について、4 年生は約 91%であり、大学全体の約 90%と同程度であった。福祉コースでは、設備や器具の使用機会がほとんどないが、全体としては高い満足度を示している。

設問 28「メディアライブラリー（図書室）の設備や学修環境」について、4 年生は約 89%であり、大学全体の約 92%をやや下回った。図書館の学修環境については概ね肯定的であるが、読書時間の短さを踏まえると、施設への満足度を実際の学修行動に結びつける工夫が必要である。

設問 29「事前事後学修・課題のための学修スペース」について、4 年生は約 93%であり、大学全体の約 88%を上回った。自習用教室等の利用割合も比較的高かったことから、学修スペースは4 年生にとって有用な資源になっていると考えられる。

設問 30「保健室や付属の医療施設」について、4 年生は約 91%であり、大学全体の約 92%と同程度であった。身体面・精神面の不安を抱える学生が一定数いることを踏まえると、相談しやすい保健・学生支援体制の周知が引き続き重要である。

設問 31「学生食堂」について、4 年生は約 87%であり、大学全体の約 80%を上回った。学生生活を支える施設として、一定の満足度が得られている。

設問 32「学科・コースの教員による指導・相談」について、4 年生は約 91%であり、大学全体の約 90%と同程度であった。4 年生では卒業研究、国家試験、就職活動など個別相談の必要性が高まるため、教員による相談支援が一定の役割を果たしていると考えられる。

設問 33「事務職員によるサポート」について、4 年生は約 80%であり、大学全体の約 89%を下回った。他の満足度項目と比較して相対的に低く、履修、実習、証明書、就職関係手続きなど、4 年生特有の事務的支援において、学生がより分かりやすい案内や迅速な対応を求めている可能性がある。

設問 34「就職支援室による進路・就職に関する支援」について、4 年生は約 84%であり、大学全体の約 91%を下回った。ただし、「とても満足」は約 40%であり、4 年生にとって就職支援室の支援は重要な意味を持っていると考えられる。福祉専門職、公務員、一般企業など進路が多様であることを踏まえ、コース教員と就職支援室の連携をさらに強化する必要がある。

設問 35「大学全般を総合的に判断して」について、4 年生は約 91%であり、大学全体の約 89%をやや上回った。総合的な満足度は高く、福祉コースでの学びや学生生活に対する肯定的評価がうかがえる。

<項目 6 不安や悩み>

「少しある・大いにある」と回答した割合に着目した。

設問 36「授業の内容についていけない」について、4 年生は約 22%であり、大学全体の約 24%をやや下回った。学年が上がるにつれて専門科目への適応が進み、授業内容への不安は相対的に低下している可能性がある。

設問 37「卒業後にやりたいことがみつからない」について、4 年生は約 31%であり、大学全体の約 31%とほぼ同程度であった。卒業を控えた段階でも、一定数の学生が将来像の明確化に課題を抱えている。専門職志向の学生だけでなく、一般企業やその他の進路を考える学生へのキャリア支援も重要である。

設問 38「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」について、4 年生は約 31%であり、大学全体の約 53%を大きく下回った。3 年生では約 67%であり、4 年生では就職活動や進路決定が進むことで、不安が軽減されている可能性がある。ただし、約 3 割の学生は不安を抱えており、個別の進路相談や精神的支援を継続する必要がある。

設問 39「経済的に勉強を続けることが難しい」について、4 年生は約 16%であり、大学全体の約 13%をやや上回った。卒業を前にしても経済的な不安を抱える学生が一定数存在することから、奨学金、授業料、生活支援等に関する情報提供が必要である。

設問 40「学内の友人関係に悩みがある」について、4 年生は約 11%であり、大学全体の約 12%と同程度であった。大きな割合ではないが、孤立や相談のしにくさを抱える学生への配慮は必要である。

設問 41「家族との関係に悩みがある」について、4 年生は約 20%であり、大学全体の約 8%を上回った。4 年生では卒業後の進路、就職先、経済面などをめぐって家族との調整が必要になる場合も考えられる。家族関係の悩みは外から見えにくいいため、学生相談室等との連携も重要である。

設問 42「身体面の健康状態への不安や悩みがある」について、4 年生は約 31%であり、大学全体の約 18%を上回った。就職活動や国家試験、卒業研究などによる疲労や生活リズムの乱れが影響している可能性がある。

設問 43「精神面の健康状態への不安や悩みがある」について、4 年生は約 38%であり、大学全体の約 20%を大きく上回った。4 年生では進路決定、卒業要件、国家試験など複数の課題が重なるため、精神的負担が高まる可能性がある。学修支援だけでなく、メンタルヘルス支援を含めた総合的な学生支援が求められる。

<項目 7 主な相談相手>

設問 44「設問 36～43 の不安や悩みについて誰に相談したか、または相談しようと思っているか」について、4 年生では「家族」が約 32%で最も高く、次いで「学内の友人」が約 22%、「学外の友人」が約 21%であった。大学全体では「学内の友人」と「家族」がそれぞれ約 27%であり、4 年生では家族への相談割合がやや高い。

また、4 年生では「大学の教職員」が約 10%であり、3 年生の約 11%と同程度であった。教職員が相談相手として一定の役割を果たしている一方、相談相手が家族や友人に偏っていることも見て取れる。精神面・身体面の不安が比較的高いことを踏まえると、学生相談室、保健室、教職員、就職支援室等を含めた相談資源の周知を継続する必要がある。

<項目 8 生成 AI・オープンバッジに関する項目>

設問 45「生成 AI をどの程度利用しているか」について、4 年生では「頻繁に利用している・時々利用している」が約 71%であり、大学全体の約 71%とほぼ同程度であった。生成 AI は学生の学修行動にすでに一定程度浸透していると考えられる。

設問 46「生成 AI の主な利用用途」について、4 年生では「授業課題やレポートの作成」が約 29%で最も高く、次いで「情報の収集」が約 27%であった。大学全体では「情報の収集」が約 39%で最も高いことから、福祉コース 4 年生では、課題作成や文章作成支援としての活用が相対的に高い可能性がある。

設問 47「生成 AI から出力された結果が正しいか確認しているか」について、4 年生では「確認している・時々確認している」が約 76%であった。大学全体の約 82%をやや下回るものの、多くの学生が確認の必要性を認識している。ただし、「あまり確認していない・確認していない」も約 25%存在しており、生成 AI の出力を批判的に確認する力、引用・出典確認、個人情報や著作権への配慮などを教育する必要がある。

設問 48「生成 AI の活用は自分の将来に必要なスキルだと思うか」について、4 年生では「そう思う・ややそう思う」が約 78%であり、大学全体の約 85%を下回った。福祉専門職として AI をどのように活用するかについて、具体的なイメージがまだ十分ではない可能性がある。相談援助、記録作成、情報収集、地域資源の整理など、福祉実践と AI 活用を関連づけた教育が求められる。

設問 49「帝京平成大学で発行しているオープンバッジについて存在を知っているか」について、4 年生で「知っている」は約 11%にとどまり、約 89%が「知らない」と回答した。大学全体でも「知っている」は約 16%であり、認知度は低い。

設問 50「就職活動にオープンバッジを活用したいと思うか」について、4 年生では「そう思う（活用した）」が約 4%、「そう思わない（活用しなかった）」が約 29%、「オープンバッジを知らない（知らなかった）」が約 67%であった。オープンバッジの制度自体が十分に周知されておらず、就職活動との接続も弱いと考えられる。今後は、取得可能なバッジの意味、履歴書・面接・ポートフォリオへの活用方法を具体的に示す必要がある。

<項目 9 学修成果>

「十分付いた・かなり付いた」と回答した割合に着目した。

設問 51「幅広い知識と教養」について、4 年生は約 67%であり、全体の約 56%を上回った。卒業を控えた段階で、4 年間の学修を通じて幅広い知識や教養が身に付いたと実感している学生が多いと考えられる。

設問 52「本を読む習慣」について、4 年生は約 29%であり、全体の約 31%と同程度であった。読書時間の短さとも関連して、読書習慣は引き続き課題である。専門職として必要な制度理解、文献読解、記録作成能力を高めるためにも、文献を読むことを授業課題や演習に組み込む必要がある。

設問 53「本・論文・資料などを読む力」について、4 年生は約 36%であり、全体の約 35%と同程度であった。読書習慣と同様に、文献や資料を読む力についての自己評価は高くない。卒業研究や実習報告、国家試験対策と関連づけながら、読む力を段階的に高めていくことが求められる。

設問 54「文章を書く力」について、4 年生は約 40%であり、全体の約 42%と同程度であった。実習記録、レポート、卒業研究、就職活動書類など、文章を書く機会が多いものの、自己評価としては十分に高いとは言えない。1 年次から 4 年次まで継続的に文章作成力を育成する必要がある。

設問 55「将来目標に向けて学修計画を立案実行する力」について、4 年生は約 40%であり、全体の約 41%と同程度であった。進路決定や国家試験対策の時期であることを踏まえると、学修計画を自律的に立て、実行する力の育成には課題が残る。

設問 56「専門分野の知識と技術」について、4 年生は約 45%であり、全体の約 46%と同程度であった。福祉専門職養成を担うコースとしては、専門知識・技術の獲得実感をさらに高める必要がある。実習、演習、国家試験対策、卒業研究を有機的に関連づけることが重要である。

設問 57「物事を分析的・批判的に考える力」について、4 年生は約 47%であり、全体の約 51%をやや下回った。生成 AI 活用の広がりを踏まえると、情報を批判的に読み解き、根拠を確認し、妥当性を判断する力の育成は一層重要である。

設問 58「他の人と協力しながら物事を進める力」について、4 年生は約 62%であり、全体の約 59%を上回った。実習、演習、ゼミ活動などを通じて、協働する力が一定程度育成されていると考えられる。

設問 59「人とコミュニケーションする力」について、4 年生は約 60%であり、全体の約 62%と同程度であった。福祉実践に不可欠な力であり、今後も実習や演習を通じた対人援助場面での学びを重視する必要がある。

設問 60「キャリアについて考え行動する力」について、4 年生は約 51%であり、全体の約 46%を上回った。就職活動を通じて、キャリアについて考え、具体的に行動する機会が増えたことが影響していると考えられる。

設問 61「問題を見つけて解決する力」について、4 年生は約 51%であり、全体の約 49%と同程度であった。実習や卒業研究を通じて、現場の課題や社会問題に向き合う経験を重ねることが、この力の形成につながると考えられる。

設問 62「自分の考えをまとめて発表する力」について、4 年生は約 51%であり、全体の約 51%と同程度であった。実習報告会、ゼミ発表、卒業研究発表など、発表機会を通じて、さらに力を高めることが期待される。

設問 63「人の意見に耳を傾け共感する態度」について、4 年生は約 67%であり、全体の約 64%を上回った。福祉コースの学びにおいて重視される共感的態度が、一定程度身に付いていると考えられる。

設問 64「規則や約束を守る態度」について、4 年生は約 62%であり、全体の約 60%と同程度であった。実習や就職活動を通じて、社会的規範を意識する機会が増えることが関係している可能性がある。

設問 65「学業と学外活動の両立等、自律的生活態度」について、4 年生は約 49%であり、全体の約 51%をやや下回った。アルバイト、就職活動、国家試験対策、卒業研究などを両立する時期であるため、自律的な時間管理の支援が必要である。

設問 66「新しいことに挑戦し結果を出す力」について、4 年生は約 44%であり、全体の約 40%を上回った。実習、就職活動、卒業研究など、挑戦を伴う経験が自己評価に反映されている可能性がある。

設問 67「国際情勢（海外事情）への関心や理解」について、4 年生は約 29%であり、全体の約 32%を下回った。国際的視野については、依然として課題がある。多文化共生、国際比較などを福祉教育の中に位置づける必要がある。

設問 68「日頃から海外の人（留学生含む）と接する力」について、4 年生は約 31%であり、全体の約 41%を下回った。そもそも海外の人や留学生と接する機会が限られている可能性があり、授業や学内活動を通じた交流機会の創出が必要である。

設問 69「日常的に SDGs を意識して行動する力」について、4 年生は約 36%であり、全体の約 36%と同程度であった。福祉と SDGs は、貧困、健康、教育、不平等、まちづくりなど多くの領域で接続してい

る。福祉専門職として SDGs をどのように実践に結びつけるかを、授業や演習の中でより明確に示していく必要がある。

<総括>

2025 年度の福祉コース 4 年生は、目標とする力、授業内容、カリキュラム、学生生活、教員による指導・相談などに対して、全般的に高い肯定的評価を示していた。特に、人間愛、協働する力、専門性を高める意欲、授業内容やカリキュラムへの満足度などは高い水準にあり、福祉コースの教育が学生の学びの実感につながっていることがうかがえる。

一方で、いくつかの課題も明らかになった。第一に、読書習慣や文献・資料を読む力、文章を書く力など、大学での学びの基盤となるアカデミックスキルに関する自己評価は必ずしも高くない。第二に、精神面・身体面の不安を抱える 4 年生が一定数存在しており、国家試験、就職活動、卒業研究が重なる時期におけるメンタルヘルス支援が重要である。第三に、生成 AI は学生に広く利用されている一方で、その出力を確認する力や、福祉実践における AI 活用の具体的理解には課題がある。第四に、オープンバッジの認知度は極めて低く、就職活動との接続も十分ではない。第五に、国際的視野、海外の人との交流、SDGs に関する意識は、他の学修成果項目と比べて低い傾向が見られた。

今後の福祉コースにおいては、4 年次の個別支援をさらに充実させるとともに、1 年次から段階的に、読解力、文章力、批判的思考力、キャリア形成力を育成することが求められる。また、国家試験対策や専門職養成だけでなく、一般企業や公務員など多様な進路を視野に入れた教育プログラムを整備することが重要である。さらに、生成 AI、オープンバッジ、SDGs、多文化共生など、近年の大学教育や社会変化に関わるテーマを福祉教育と関連づけることで、学生が卒業後の社会で主体的に学び続ける力を高めることが期待される。

2026 年 6 月 1 日

2025 年度 メディア文化コース 学修行動アンケート分析

人間文化学科メディア文化コース

コース主任 佐々木良壽

<回答率>

コース全体としての回答率は 96.6%で、昨年度 (94.9%) に比べアップし、中野キャンパス全体の 92.5%を上回った。学年別に見ると、1 年生 93.8%(昨年度 93.6%)、2 年生 97.8%(同 95.2%、3 年生 100% (同 98.8%)、4 年生 95.3%(同 91.5%)で、いずれの学年も中野全体を上回った。引き続き、回答率向上に向けて、各学年のセミナー等で指導していきたい。

<1. 「目標とする力」>

「目標とする力」について 4 年の回答を分析すると、Q1「人間愛」、Q2「他者との協働」、Q3「自立してたくましく生きる力」、Q5「専門性を高める意欲と力」、Q6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」については、「十分」、「やや」を合わせた数字は、いずれも大学全体の数字をわずかだが上回った。Q4「創造的な問題解決能力」については、大学全体の 88.7%に対して本コースは 92.7%となっており、造形やデジタル、映像などの専門分野での 4 年間の演習、グループワークなどを通じて、学生が自信を付けたことを物語っているといえそう

<2. 授業>

Q7 「授業の予習や復習」に関して、「時々した」が各学年とも最も多く、1 年 57.8%、2 年 56.2%、3 年 42.3%、4 年 59.8%だった。4 年は「頻繁にした」が 18.3%。各学年で最も低かった分、「時々した」の割合が増えた。一方、「あまりしなかった」、「まったくしなかった」は、1 年、2 年はそれぞれ 18.9%、14.6%だったが、3 年が 26.9%と目立って高かった。学生の意識が就活にシフトしていることが影響しているとも考えられるが、大学生活後半にいかにして学修意欲を維持・向上させるかは重要な課題だ。

Q8 「学習支援システム」を利用した勉強では、「時々した」まで含めると、1 年 81.2%、2 年 79.8%、3 年 78.2%、4 年 76.8%で、manaba を利用した勉強が浸透しているといえそう

Q9 「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」は、「頻繁にした」、「時々した」を合わせると、1 年 55.5%、2 年 62.9%、3 年 55.1%、4 年 50.0%で、全体の 35.4%を大きく上回っており、学生と教員の距離の近さを示している、といえそう

Q10 「就職や資格取得に関わる勉強」では、4 年で「頻繁にした」「時々した」が計 70.9%で、学年が進むに従って数字が上がっており、就職に向けて資格取得や就職に関わる勉強の必要性に対する認識が強まっていることを伺わせるが、合計では 51.6%に止まり、大学全体の 66.6%には大きく水をあけられている。今後は、資格取得を積極的に勧めていく必要

がありそうだ。

Q11 「友人と一緒に勉強」では、「あまりしなかった」「まったくしなかった」は、1年 32.2%、2年 34.8%、3年 48.7%、4年 35.3%。個人での創作活動が軸となっているコースの性格ゆえの数字とみられる。

Q12 の「メディアライブラリーを利用した勉強」と Q13 の「学内の自習用教室等を利用した勉強」については、「あまりしなかった」、「しなかった」を合わせると、各学年ともに 60~70%前後と高い数字だが、コースの特性として創作活動に重点が置かれていることから、図書館や自習室から足が遠のいているものとみられる。

< 3. 授業期間中の時間の使い方 >

Q14 「授業時間外での学修時間」について 1 年では 1~2 時間が 35.6%と最も多かったが、2 年以上の学年は 1 時間未満が 28.1~35.9%と最も多く、授業時間外の学修意欲をいかに上げていくかは大きな課題と言える。

Q15 「学内で過ごす時間」では、各学年ともに、「5~6 時間」「4~5 時間」が最も多かった。

Q16 「睡眠時間」では、各学年ともに、5 時間以上が各学年ともに 60%を超えているが、1 年、2 年生では「2~3 時間」（それぞれ 3.3%、4.5%）、「3~4 時間」（同 4.42%、9.0%）など、大学全体と比べると睡眠不足気味の学生も一定数に上がることがわかった。

Q17 「趣味や娯楽の時間」では、1、2、4 年で「2~3 時間」が最も多く、それぞれ 23.3%、27.0%、20.7%。3 年生は、「5~6 時間」、「4~5 時間」、「3~4 時間」がいずれも 16.7%で並んだ。ただ、各学年ともに「8 時間以上」という回答が大学全体の 2.2%と比べると目立って高く、1 年 8.9%、2 年 9.0%、3 年 15.4%、4 年 13.4%で、コースの性格上、オンラインのゲームに多くの時間を費やしていることが伺われる。

Q18 「本を読んだ時間」については、「1 時間未満」が 1~3 年で 50%前後。4 年は 40.2%で、読書時間がやや多くなっている。大学全体の 64.1%に比べると割合は低いものの、読書の習慣をいかに身に付けさせるかは、引き続き大きな課題だ。

< 4. 回数 >

Q19 「授業欠席回数」については、「3 回以上」が 1 年 33.3%、2 年 50.6%、3 年 55.1%、4 年 52.4%で、2~4 年で大学全体の 30.4%を大幅に上回っている。欠席回数が多い原因について調査・分析し、学修指導していく必要がある。

Q20 「部活動、サークル」では、「なし」、「1 回」、「2 回」を合わせると、各学年ともに 90%前後に上っている。大学全体の数字もほぼ同じで、部活、サークル活動の低調さがうかがえる。

Q21 「アルバイト」については、週 3 回が最も多かった。1 年は、「なし」がもっと多く 30.0%だったが、「週 3 回」は、各学年それぞれ 25.6%、31.5%、34.6%、37.8%。「5 回以

上」も、1年 7.8%、2年 6.7%、3年 12.8%、4年 12.2%で、2年以外は大学全体の 7.3%を上回っており、「趣味や娯楽」に費やした時間と合わせると、「本を読む時間」や「学修時間」を圧迫しているといえそうだ。

Q22 「ボランティア活動」については、各学年ともに「なし」が圧倒的に多く、「1回」も合わせると、90%以上となっており、ボランティア活動への関心の低さがうかがえる。

< 5. 満足度 >

Q23 「授業内容」では、「とても」と「やや」を合わせると「満足」が1年 91.1%、2年 95.5%、3年 91.1%、4年 92.7%で、各学年とも「満足感」を持って授業を受けていたことがわかった。

Q24 「所属する学科・のカリキュラム」では、「とても」「やや」を合わせた「満足」が、1年 90.0%、2年 96.7%、3年 93.6%、4年 92.7%で、大学全体の 88.1%を大きく上回った。授業内容に関する各教員の創意・工夫などが学生の評価を受けているといえる。

Q25 「学生生活」については、どの学年も「とても」「やや」を合わせた「満足」が90%前後に達しており、ほとんどの学生が大学生活に一定の満足感を持っていたことがわかった。

Q26～30 講義室やメディアライブラリーなど施設・設備については、いずれも「とても」「やや」を合わせた「満足」が90%以上に達していた。

Q31 「学生食堂」では、「とても」「やや」の「不満足」が合計で 15.7%だった。

Q32 「学科・コース教員による指導・相談」については、「とても」「やや」を合わせた「満足」が、各学年ともに 90%以上と高い数字となっている。

Q33 「事務職員によるサポート」も各学年で、「やや満足」までが90%前後となっている。

Q34 「就職支援室による支援」については、「とても」「やや」を合わせた「満足」が各学年ともに 90%以上に達していた。

Q35 「大学全般を総合的に判断して」は、各学年とも「とても」「やや」を合わせた「満足」が90%以上に達していた。

< 6. 不安や悩みに関して >

Q36 「授業内容についていけない」については、「大いにある」「少しある」を合わせると、1年 26.7%、2年 31.5%、3年 18.0%、4年 6.1%で、専門科目が多くなる2年で「ついていけない」ことに不安を感じている学生が多いことが浮き彫りになった。2年の授業におけるきめ細かい指導が課題といえる。

Q37 「卒業後にやりたいことが見つからない」は、「少しある」「大いにある」が、1年計 64.5%、2年同 50.2%、3年同 37.4%、4年同 28.1%。3年の就活期になっても「やりたいことが見つからない」まま就活を開始している学生が一定数いることを物語っている。

Q38 「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」は、「すこしある」「大いにある」が、1年 75.5%、2年 73%、3年 70.6%、4年 33%で、Q37 と合わせると、将来に対する学生の不安が強いことがわかった。

Q39 「経済的に勉強することが難しい」は、各学年共に、「少し」「大いに」を合わせた「ある」が 10%前後あり、経済的な問題を抱えた学生が一定数存在することを浮き彫りにしている。

Q40 「学内の友人関係」では、「少し」「大いに」を合わせた「ある」が1年 18.9%、2年 16.8%で、友人関係の構築に悩む学生が低学年に多いことが浮き彫りになった。

Q41 「家族との関係」では、各学年で 10%前後が「少し」「大いに」を合わせた「ある」と答えている。

Q42 「身体面の健康」については、「大いに」「少し」を合わせた「ある」が、1年 26.7%、2年 21.4%、3年 19.3%、4年 15.9%だった。

Q43 「精神面の健康状態への不安や悩みがある」で、「少し」「大いに」を合わせた「ある」が、1年 24.5%、2年 27.0%、3年 25.6%、4年 28.0%で、Q42 と合わせると、4人に1人が心身の健康に不安を抱える学生が多いことを物語っている。

<AI について>

Q45 「どの程度利用しているか」は、「頻繁に」「時々」を合わせた「利用している」は、1, 2年で70%以上、3年は88.5%に達しており、AIが日常生活で不可欠となっていることを浮き彫りにしている。

Q46 「主な用途」については、1～3年は「情報の収集」が40%以上、4年は「就職活動」が23.2%だった。「授業課題やレポート」は各学年ともに、20%前後で「情報の収集」に次ぐ用途になっている。

Q47 「結果を確認しているか」については、各学年共に、「あまり」を含めた「確認していない」が10%以上に上っており、AIの使い方を指導していく必要がある。

<オープンバッジ>

Q49、50 「知っているか」について、「知らない」が各学年共に80～90%で、周知の必要性を浮き彫りにした。

<大学入学時と比べた能力について>

Q51「幅広い知識と教養」、Q52「本を読む習慣」、Q53「本・論文・資料などを読む力」、Q54「文章を書く力」、Q55「将来目標に向けて学習計画を立案実行する力」、Q56「専門分野の知識と技術」、Q57「ものごとを分析的・批判的に考える力」、Q58「他の人と協力しながら物事を進める力」、Q59「人とコミュニケーションする力」、Q60「キャリアについて考える力」、Q61「問題を見つけて解決する力」、Q62「自分の考えをまとめて発表する力」、

Q63「人の意見に耳を傾け共感する力」、Q64「規則や約束を守る力」、Q65「学業と学外活動の両立等、自律的生活態度」、Q66「新しいことに挑戦し結果を出す力」、Q67「国際情勢への関心や理解」、Q68「日頃から海外の人と接する力」Q69「日常的にSDG sを意識して行動する力」の各項目について4年生を見ると、「十分」「かなり」「少し」を合わせた「付いた」との回答は1～3年より高く、総じて入学時からの成長を実感していることがわかった。

ただ、Q52「本を読む習慣」で、「あまり」「まったく」を合わせた「付いていない」が32.9%、Q66「新しいことに挑戦し結果を出す力」で、「付いていない」が18%、Q67「国際情勢への関心や理解」で、「付いていない」が24.4%、Q68「日頃から海外の人と接する力」で、「付いていない」が33%、Q69「日常的にSDG sを意識して行動する力」で、「付いていない」が22%だった点が気になった。

(以上)

2026 年 6 月 3 日

2025 年度 グローバルコミュニケーションコース 学修行動アンケート分析

人間文化学科

グローバルコミュニケーションコース

コース主任 佐々木良壽

<回答率>

コース全体としての回答率は 90.3%で、昨年度 (88.3%) に比べアップしたが、中野キャンパス全体の 92.5%は下回った。学年別に見ると、1 年 81.1%(昨年度 87.0%)、2 年 92.0%(同 89.1%)、3 年 96.9% (同 92.3%)、4 年 93.3%(同 86.2%)。1 年の回答率が悪化していたが、2~4 年は昨年度から大幅に改善した。回答率向上に向けて、引き続きセミナー等で指導していきたい。

< 1. 「目標とする力」 >

「目標とする力」について 4 年の回答を分析すると、Q1「人間愛」、Q2「他者との協働」、Q3「自立してたくましく生きる力」、Q4「創造的な問題解決能力」、Q5「専門性を高める意欲と力」、Q6「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」のいずれについても、「十分」、「やや」を合わせた「身についた」は、いずれも大学全体の数字を上回った。なかでも、Q6 については、大学全体の 79%に対して、本コース 4 年は 92.9%に達しており、コースの目標が一定程度達成できている、といえそうだ。

< 2. 授業 >

Q7 「授業の予習や復習」

「時々した」が各学年とも最も多く、1 年 50.0%、2 年 56.5%、3 年 48.4%、4 年 64.3% だった。3 年は「頻繁にした」が 25.8%と他の学年に比べ目立って高かった。

一方、「あまりしなかった」、「まったくしなかった」は、1 年、2 年でそれぞれ 36.7%、30.4%と高く、基礎的な段階で学修意欲の改善は今後の大きな課題と言える。3 年でも 25.7%、4 年では 17.9%と意欲の低さが目に付く。

Q8 「学習支援システム」を利用した勉強

「時々した」まで含めると、1 年 73.4%、2 年 73.9%、3 年 71.0%、4 年 78.6%だった。

Q9 「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」

「あまり」「まったく」を合わせた「しなかった」が、1 年 53.3%、2 年 52.7%、3 年 51.6%、4 年 46.4%で、大学全体の 54.6%とほぼ同じだった。

Q10 「就職や資格取得に関わる勉強」

学年で差が大きく、「した」は 1 年 56.6%、3 年 80.7%、4 年 64.3%に対して、2 年 34.7%と低かった。コースの性格からも、TOEIC など英語関連の資格試験受験の推進が今後の課題といえる。

Q11 「友人と一緒に勉強」

「あまりしなかった」「まったくしなかった」は、1 年 40.0%、2 年 47.8%、3 年 58.1%、4 年 57.1%だった。

Q12 「メディアライブラリーを利用した勉強」

「頻繁に」「時々」を合わせた「利用した」が、4 年で 71.4%と他の学年に比べて目立って高かった。ほかの学年は大学全体とほぼ同じだった。

Q13 「学内の自習用教室等を利用した勉強」

「頻繁に」「時々」を合わせた「した」は、2 年で 61.9%と目立って高かったが、ほかの学年は大学全体の 45.3%を下回った。

< 3. 授業期間中の時間の使い方 >

Q14 「授業時間外での学修時間」

1 年では 1～2 時間が 43.3%と最も多かったが、2 年以上の学年は 1 時間未満が 26.1～39.3%と最も多く、学修意欲の低さが目立った。

Q15 「学内で過ごす時間」

各学年ともに、「5～6 時間」「4～5 時間」が最も多かった。

Q16 「睡眠時間」

各学年ともに、5 時間以上が各学年ともに 60%を超えているが、2 年生では 2 時間以下が計 8.6%だった点が気になった。

Q17 「趣味や娯楽の時間」

1 年で「5～6 時間」が 23.3%と最も多く、2 年で「4～5 時間」「3～4 時間」がそれぞれ 21.7%、3 年は「3～4 時間」が 32.3%、4 年は「2～3 時間」が 32.1%で、最も多かった。2 年で「8 時間以上」が 13.0%だった点が気になった。

Q18 「本を読んだ時間」

「1 時間未満」は 1 年 40.0%、2 年 34.8%だったが、3 年 51.6%、4 年 57.1%で、高学年ほど読書に対する意欲が低いことは、今後の学修指導の大きな課題といえる。

< 4. 回数 >

Q19 「授業欠席回数」については、各学年とも「3 回以上」が 50%を超えており、授業に対する意欲の低さが目立った。

Q20 「部活動、サークル」では、「なし」、「1 回」、「2 回」を合わせると、各学年ともに 90%前後に上っている。大学全体の数字もほぼ同じで、部活、サークル活動の低調さがうかがえる。

Q21 「アルバイト」については、週 3 回が最も多く、30～43%だった。

Q22 「ボランティア活動」については、各学年ともに「なし」が圧倒的に多く、「1 回」も合わせると、90%以上となっており、ボランティア活動への関心の低さがうかがえる。

< 5. 満足度 >

Q23 「授業内容」

「とても」と「やや」を合わせると「満足」が2年で69.6%と目立って低かった。

Q24 「所属する学科・のカリキュラム」

「とても」「やや」を合わせた「満足」が、4年の96.4%に対して、2年が60.8%と低かった。

Q25 「学生生活」

「とても」「やや」を合わせた「満足」が1, 3, 4年で80%を超えたが、2年が70%を下回った。

Q26～30 講義室やメディアライブラリーなど施設・設備

いずれも「とても」「やや」を合わせた「満足」が1, 3, 4年では80%以上だったが、2年がいずれも目立って低く、否定的な回答への傾斜が2年の特徴といえそう。

Q31 「学生食堂」

2年の満足度が目立って低かった。

Q32 「学科・コース教員による指導・相談」

1年、4年で満足度が高い一方で、2, 3年で「とても」「やや」を合わせた「満足」が、70%強にとどまった。

Q33 「事務職員によるサポート」

1年の満足度はほぼ100%だったが、2, 3, 4年で「やや不満」「とても不満」が26.1～14.3%で、大学全体10.8%より高かった。

Q34 「就職支援室による支援」

2年の不満度が高いが、他の学年は大学全体の同じ程度の満足度を示した。

Q35 「大学全般を総合的に判断して」

2年の満足度が80%に届かなかったが、他の学年は90%近くだった。

< 6. 不安や悩みに関して >

Q36 「授業内容についていけない」

「大いにある」「少しある」を合わせると、1年20.0%、2年17.4%、3年6.5%、4年7.1%で、総じて授業についていけないことがわかった。

Q37 「卒業後にやりたいことが見つからない」

「少しある」「大いにある」が、3年35.5%、4年39.3%で、「やりたいことが見つからない」まま就活を開始している学生がかなり多いことを物語っている。

Q38 「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」

「すこしある」「大いにある」が、3年で67.7%に上っており、進路に関して学生の不安が強いことがわかった。

Q39 「経済的に勉強することが難しい」

1～3年で、「少し」「大いに」を合わせた「ある」が20%を超えており、経済的な問題を抱えた学生が一定数存在することが浮き彫りになった。

Q40 「学内の友人関係」

「少し」「大いに」を合わせた「ある」が1年20.0%、2年21.7%。友人関係の構築に悩む学生が低学年に多いことがわかった。

Q41 「家族との関係」

各学年で10%前後が「少し」「大いに」を合わせた「ある」と答えている。

Q42 「身体面の健康」

「大いに」「少し」を合わせた「ある」が、2年26.0%、4年25.0%で、多かった。

Q43 「精神面の健康状態への不安や悩みがある」

「少し」「大いに」を合わせた「ある」が、1年13.4%、2年17.4%、3年25.8%、4年21.5%で、高学年になると精神面での不安が高まっていた。

<AIについて>

Q45 「どの程度利用しているか」

「頻繁に」「時々」を合わせた「利用している」は、1年76.7%だったが、2年69.6%、3年71.0%とやや低かった。4年では85.7%だった。

Q46 「主な用途」については、どの学年も「情報の収集」が最も多かったが、3年は「就職活動」が32.3%で最も多かった。「語学学修」が合計17%で、大学全体の6.5%に比べて目立って高く、コースならではのAIの使い方が行われていることがわかった。

Q47 「結果を確認しているか」については、1～3年で、「あまり」を含めた「確認していない」が20%前後以上に上っており、AIの使い方を指導していく必要がある。

<オープンバッジ>

Q49、50 「知っているか」について、「知らない」が各学年共に80%以上で、周知の必要性を浮き彫りにした。

<大学入学時と比べた能力について>

Q51「幅広い知識と教養」、Q52「本を読む習慣」、Q53「本・論文・資料などを読む力」、Q54「文章を書く力」、Q55「将来目標に向けて学習計画を立案実行する力」、Q56「専門分野の知識と技術」、Q57「ものごとを分析的・批判的に考える力」、Q58「他の人と協力しながら物事を進める力」、Q59「人とコミュニケーションする力」、Q60「キャリアについて考える力」、Q61「問題を見つけて解決する力」、Q62「自分の考えをまとめて発表する力」、Q63「人の意見に耳を傾け共感する力」、Q64「規則や約束を守る力」、Q65「学業と学外活動の両立等、自律的生活態度」、Q66「新しいことに挑戦し結果を出す力」、Q67「国際情勢への関心や理解」、Q68「日頃から海外の人と接する力」、Q69「日常的にSDGsを意識して

行動する力」の各項目について4年生を見ると、「十分」「かなり」「少し」を合わせた「付いた」との回答はほとんどが1～3年より高く、総じて入学時からの成長を実感していることがわかった。

ただ、Q52「本を読む習慣」で、「あまり」「まったく」を合わせた「付いていない」が39.3%、Q53「本・論文・資料などを読む力」が「付いていない」が21.5%で、大学時代に身につけるべき力の中でも極めて大切な力が付いていない学生が多いことが浮き彫りになった。

(以上)

2025 年度 経営学科 学修行動と学修成果の調査の分析結果

経営学科の3つのポリシーの観点から、学修成果、満足度の状況を確認した。

1. 学修成果と満足度の確認

以下、本学科学生の目標とする力に関する自己評価（図1）、教育環境に対する満足度（図2）に関する全学年のアンケート結果をまとめた。なお、学修成果についてはアンケート調査の設問1～6の回答の選択肢「4. 十分身に付いた、3. やや身に付いた、2. あまり身に付いていない、1. 全く身に付いていない」、満足度については設問23～35の回答の選択肢「4. とても満足、3. やや満足、2. やや不安、1. とても不安」の平均値を用いた。

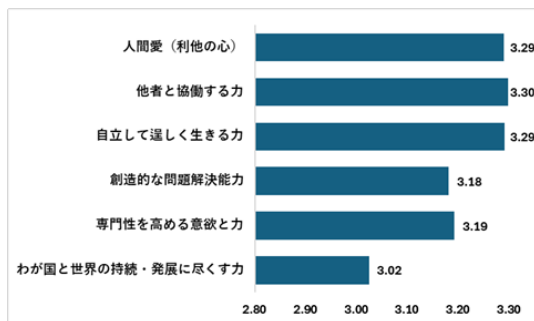


図1 目標とする力に関する自己評価

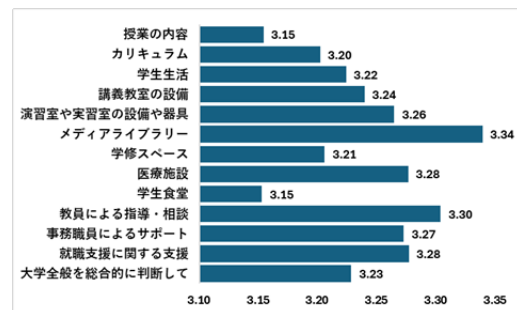


図2 教育環境に対する満足度

まず、卒業時に身につけることを目標とする力の平均は3.21であり、全体として肯定的な評価が示された。特に高かったのは「他者と協働する力」3.30、「自立して逞しく生きる力」3.29、「人間愛（利他の心）」3.29であり、他者と関わりながら主体的に行動する姿勢や、社会の中で自律的に生きるための基盤が比較的良好に育成されていることがうかがえる。これらは、演習やゼミ活動、日常的な指導・相談、就職支援等を通じて、学生が他者との関係性の中で学びを深めてきた成果として解釈できる。一方で、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」は3.02にとどまり、他項目と比べると相対的に低い。社会課題や持続可能性と自らの専門的学びとのつながりを、授業や演習の中でより具体的に示し、地域・企業・社会と結びつけた学修機会を積み重ねることが重要である。

次に、教育環境や支援体制に対する満足度平均は3.24であり、全体としておおむね良好な水準であった。中でも「メディアライブラリー」3.34、「教員による指導・相談」3.30、「就職支援」3.28が高く、学修を支える施設面と人的支援が学生の満足感を下支えしていることが明確である。特に教員との距離の近さや相談のしやすさは、学修継続や進路選択を支える基盤として大きな意味をもっていると考えられる。他方、「授業の内容」3.15、「学生食堂」3.15、「カリキュラム」3.20は相対的に低く、教育内容そのものの魅力や体系性、学びの見通しの伝わりやすさについては改善の余地がある。授業ごとの到達目標や学年進行に応じた学びの位置づけを丁寧に可視化するとともに、学生が学修の積み重ねを実感できるよう、科目間の連続性や学びの意義を一層明確にしていく必要がある。

2. 4年間で身に付いた学修成果と満足度の度合い

本分析では、4年生の回答結果に着目し、大学入学時と比べて身に付いた学修成果と満足度について、4年生と全学年生の平均値を比較して整理した。4年生は、4年間の学びを経て卒業を目前に控えた段階にあり、在学中の学修成果や学生生活全体に対する評価を総括的に把握するうえで重要な対象である。そこで、本分析も学修成果についても設問 1～6、満足度についても設問 23～35 の回答の平均値を用いて、4年生の学びに対する全体傾向を把握した。

4年生の成長実感 6 項目平均は 3.30 で、学科全体平均 3.21 を 0.09 上回った。肯定的回答（「十分身に付いた」＋「やや身に付いた」）は全項目平均で 88.4% となり、学修成果を概ね前向きに捉えていることがうかがえる。特に「他者と協働する力」3.40、「人間愛」3.40、「自立して逞しく生きる力」3.38 は、いずれも肯定的回答が 9 割を超えており、対人関係力や主体性に関する教育成果が着実に表れている。他方、「創造的な問題解決能力」3.21、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」3.06 は相対的に低く、専門的学びを社会課題や将来の役割意識へ結び付ける働きかけをさらに強める必要がある。

満足度 13 項目平均は 3.27 で、学科全体平均 3.24 をやや上回っ

た。肯定的回答（「とても満足」＋「やや満足」）は平均 89.8% であり、大学生活全体に対する評価は総じて安定している。中でも「学科・コースの教員による指導・相談」3.37、「メディアライブラリーの設備や学修環境」3.35、「学生生活」3.31 が高く、教員との距離の近さや学修支援環境が本学科の強みとして確認された。一方、「授業の内容」3.19、「事前事後学修のための学修スペース」3.19、「学生食堂」3.22 は相対的に低く、教育内容の伝わり方や日常的に利用する学内環境の改善が満足度向上の鍵になる。

今後の対策の方向性として、①「問題解決力」「社会への貢献意識」を高めるため、授業・演習・卒業研究・地域連携を結び付け、学びが社会や仕事にどうつながるかを振り返る機会を増やす、さらに ②授業内容、到達目標、評価基準、学修成果を分かりやすく示すとともに、事前事後学修で使いやすい学修スペースの案内・整備を進めていくことが考えられる。

表1. 身に付いた目標とする力

項 目	4年生	全学年
人間愛（利他の心）	3.40	3.29
他者と協働する力	3.40	3.30
自立して逞しく生きる力	3.38	3.29
創造的な問題解決能力	3.21	3.18
専門性を高める意欲と力	3.28	3.19
わが国と世界の持続・発展に尽くす力	3.06	3.02

表2. 教育環境に関する満足度

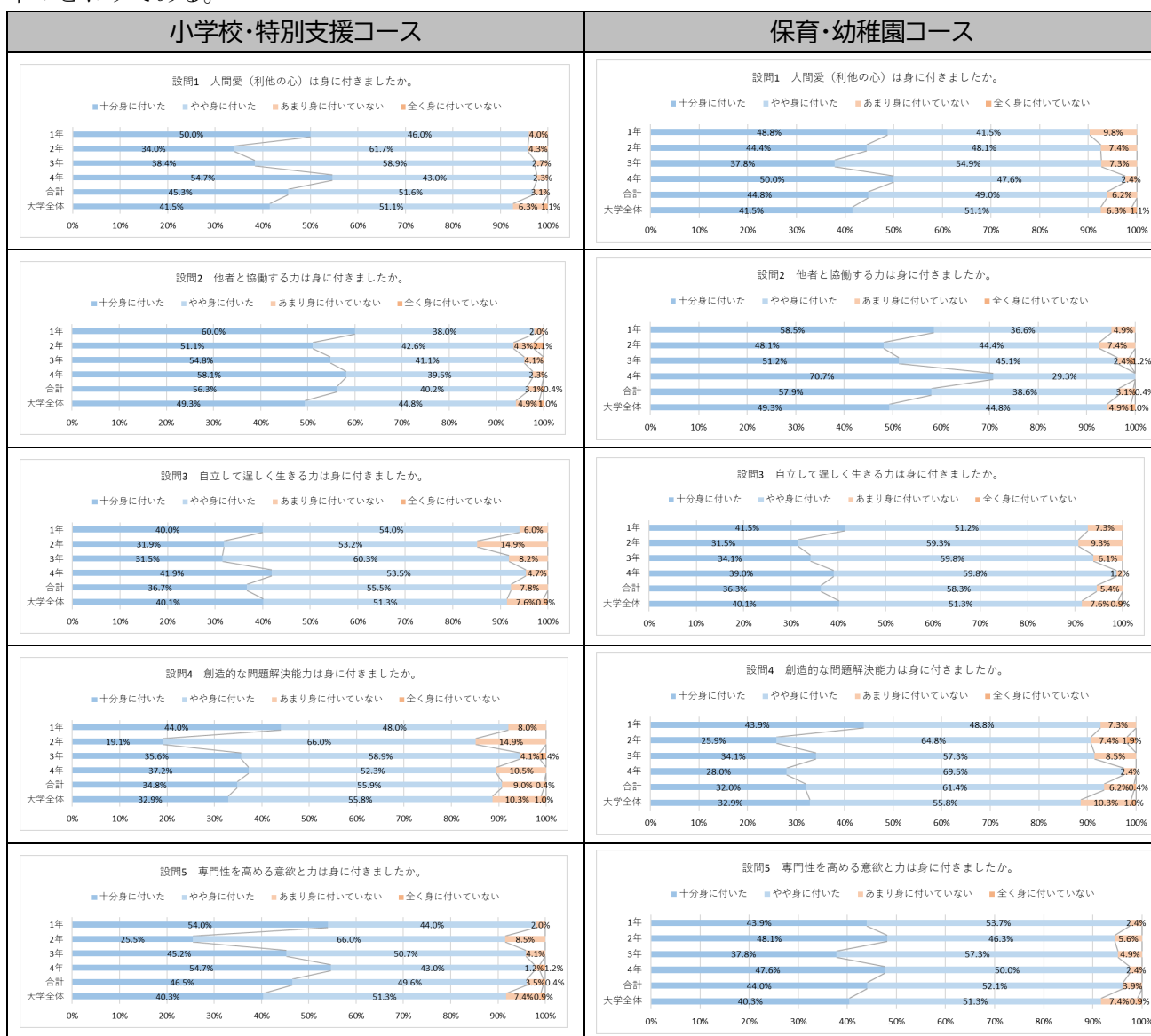
項 目	4年生	全学年
授業の内容	3.19	3.15
カリキュラム	3.23	3.20
学生生活	3.31	3.22
講義教室の設備	3.30	3.24
演習室や実習室の設備や器具	3.27	3.26
メディアライブラリーの設備や学修環境	3.35	3.34
事前事後学修・課題のための学修スペース	3.19	3.21
保健室や付属の医療施設	3.26	3.28
学生食堂	3.22	3.15
教員による指導・相談	3.37	3.30
事務職員によるサポート	3.28	3.27
就職支援に関する支援	3.29	3.28
大学全般を総合的に判断して	3.28	3.23

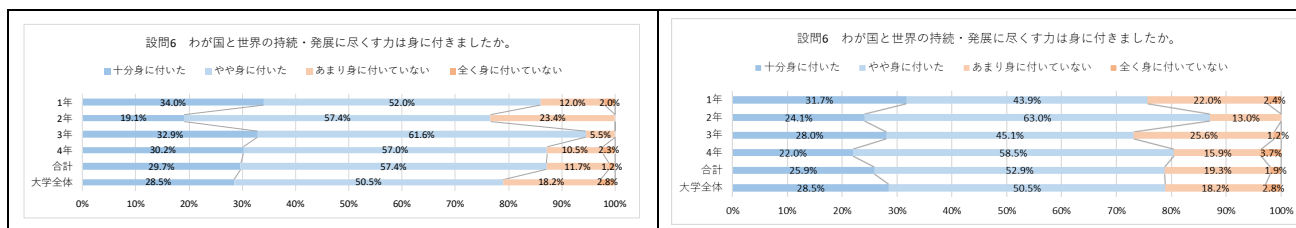
2025年度 児童学科 学修行動調査アンケートの分析結果

児童学科では、学修行動に関するアンケート調査を実施し、分析を行った。以下では、今後の学修指導に有益と考えられる結果および学生の満足度向上に資する結果に絞ってまとめる。

1. 本学の「目標とする力」の定着度について

項目1（設問1～6）では、本学の「目標とする力」である「人間愛」「他者と協働する力」「自立して逞しく生きる力」「創造的な問題解決能力」「専門性を高める意欲と力」「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」について、どの程度身に付いたと実感しているかを問うている。回答は「十分に身に付いた」「やや身に付いた」「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」の4件法である。その結果については以下のとおりである。





「十分に身に付いた」「やや身に付いた」と回答した割合は、小学校・特別支援コースおよび保育・幼稚園コースのいずれにおいても、各コースの合計が大学全体の平均を上回っている。

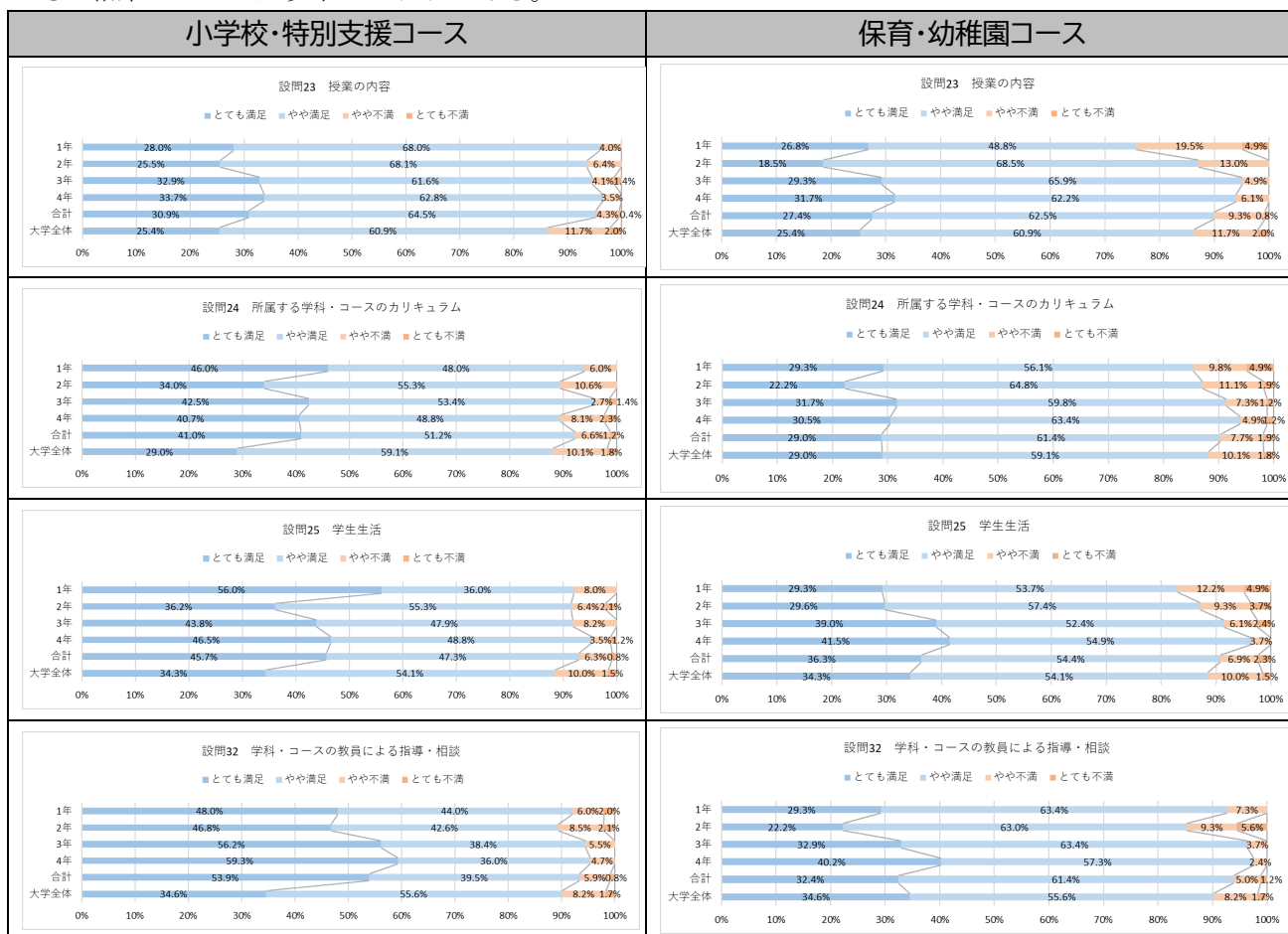
また、小学校・特別支援コースでは、設問1・設問2・設問5において、これらの肯定的回答の割合がすべての学年で9割を上回っている。同様に、保育・幼稚園コースにおいても、設問1～設問5のすべてで同割合が各学年において9割を上回っている。

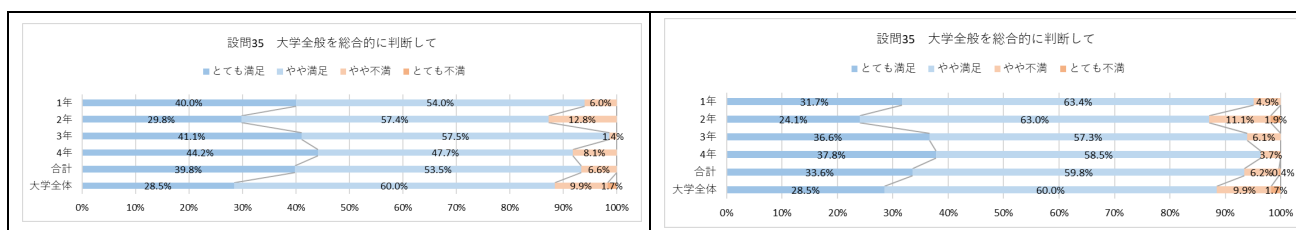
これらの結果から、本学の目標とする力について、「身に付いた」と実感している学生の割合は高い水準にあるといえる。

2. 本学の教育内容、学修支援についての満足度について

項目5では、設問23～35において本学の教育内容や設備、学修支援に関する満足度を問うている。ここでは、「教育内容」「学修支援」「学生生活」に関する代表的な設問として、設問23「授業の内容」、設問24「所属する学科・コースのカリキュラム」、設問25「学生生活」、設問32「学科・コースの教員による指導・相談」に絞り、学生の満足度を分析する。回答は「とても満足」「やや満足」「やや不満」「とても不満」の4件法である。

その結果については以下のとおりである。





設問 23「授業の内容」について、「とても満足」「やや満足」と回答した割合は、小学校・特別支援コースで 95.4%、保育・幼稚園コースで 89.9%であり、大学全体の 86.3%を上回っている。このことから、本学科における授業内容への満足度は相対的に高いことがうかがえる。

設問 24「カリキュラム」についても、「とても満足」「やや満足」と回答した割合は、小学校・特別支援コースで 92.2%、保育・幼稚園コースで 90.4%となり、大学全体の 88.1%を上回っている。これにより、本学科・コースのカリキュラムに対する満足度も高いことが示されている。

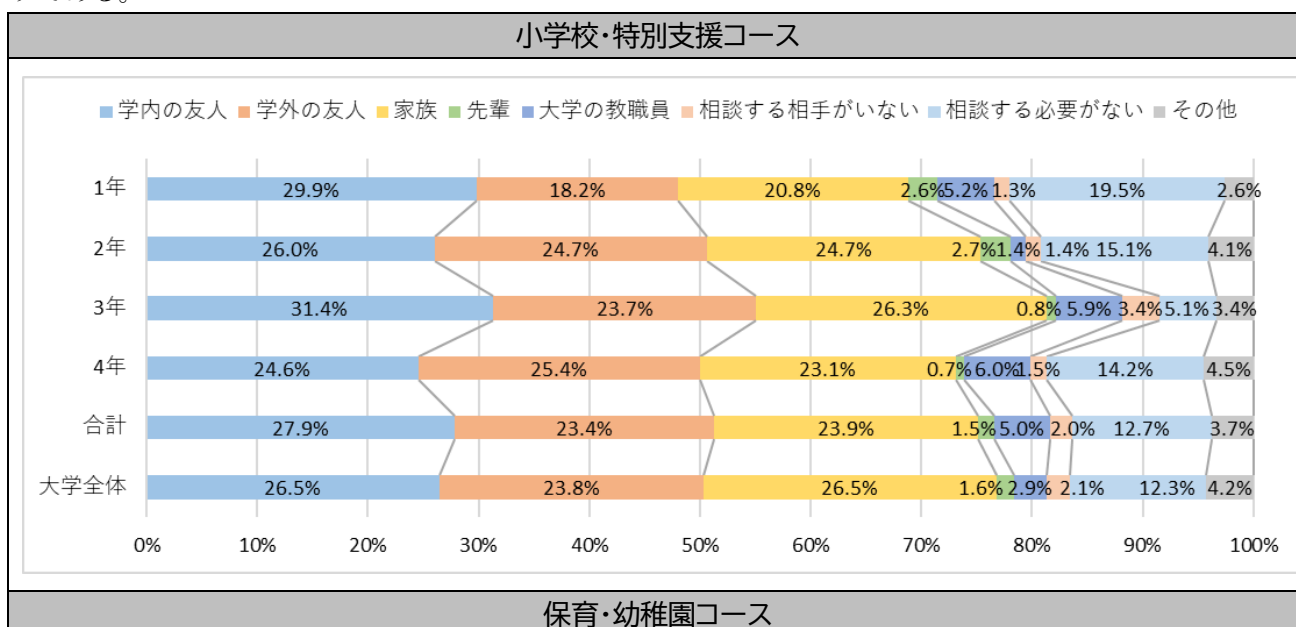
さらに、設問 32「教員による指導・相談」に関しても、「とても満足」「やや満足」と回答した割合は、小学校・特別支援コースで 93.4%、保育・幼稚園コースで 93.8%と、大学全体 (90.1%) を上回っている。

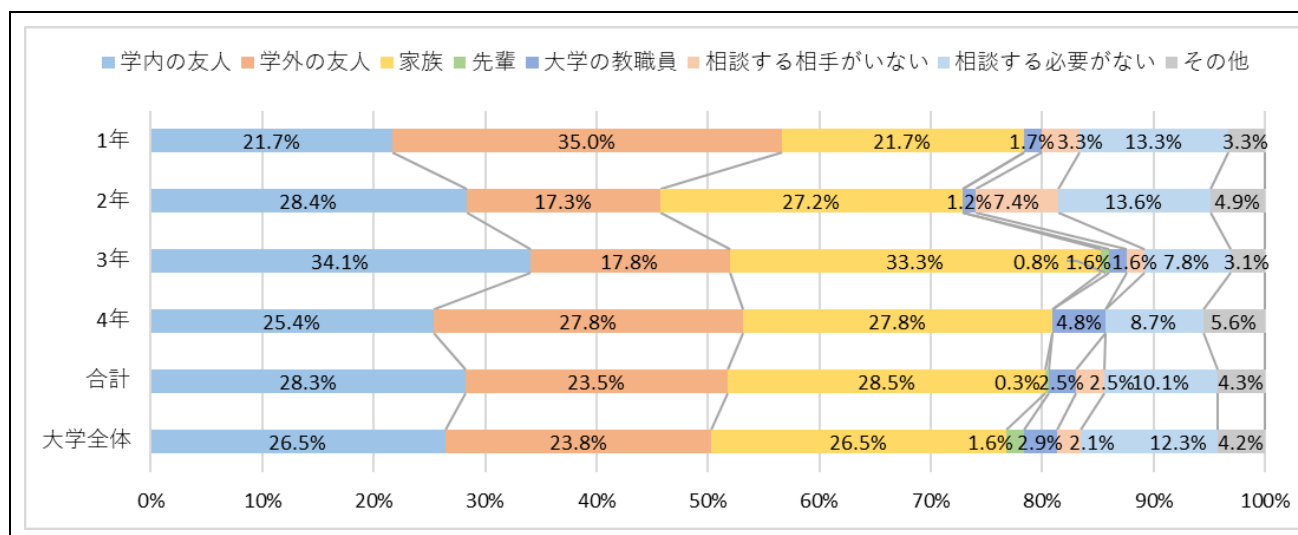
以上の結果から、本学科・コースにおける教育内容、カリキュラムおよび教員による支援に対する満足度は総じて高く、そのことが設問 25「学生生活」および設問 35「大学全体の評価」においても、大学平均を上回る結果につながっていると考えられる。

3. 不安や悩みの相談相手について

項目 6 (設問 36～44) では、学修や進路、健康等に関する不安や悩みについて調査している。ここでは、設問 44「不安や悩みの相談相手」に着目する。

なお本設問は、以下の選択肢「学内の友人」「学外の友人」「家族」「先輩」「大学の教職員」「相談する相手がいない」「相談する必要がある」「その他」から 2 つまで選択する形式である。その結果は以下のとおりである。





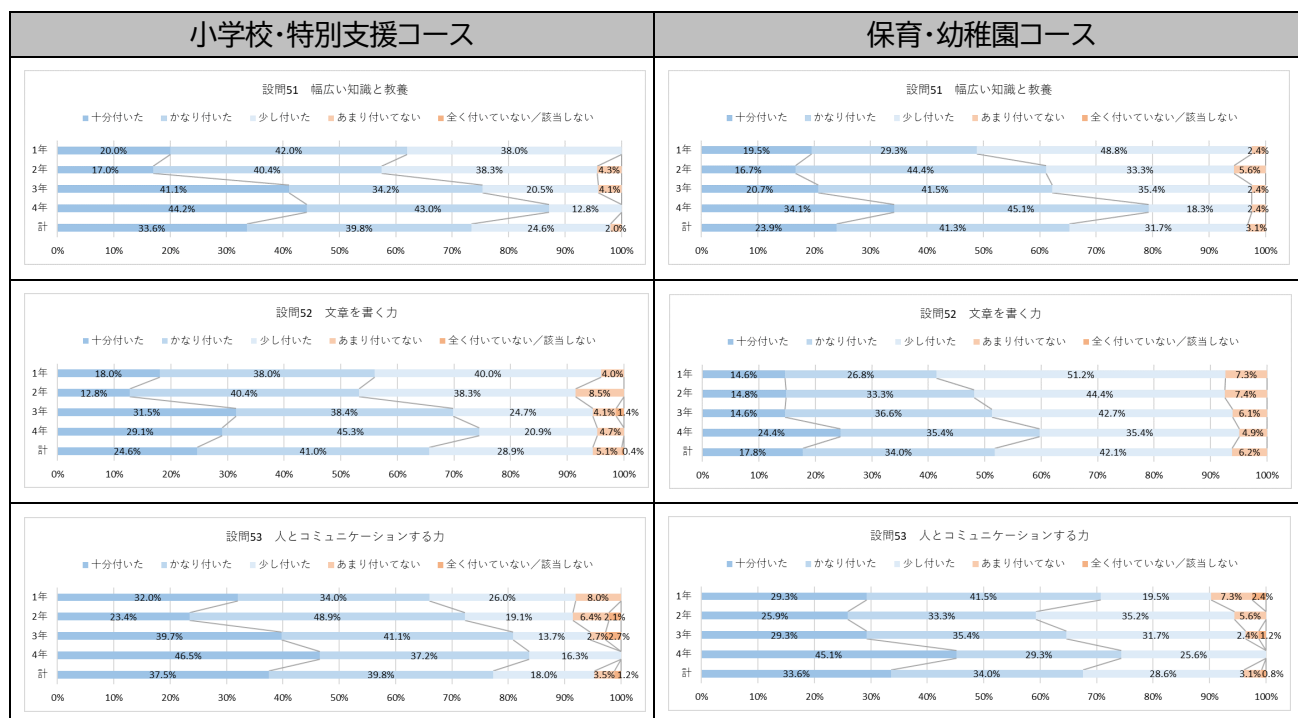
特に4年生の結果に注目すると、小学校・特別支援コースでは「大学の教職員」と回答した割合が6.0%、保育・幼稚園コースでは4.8%であり、いずれも大学全体の割合を上回っている。

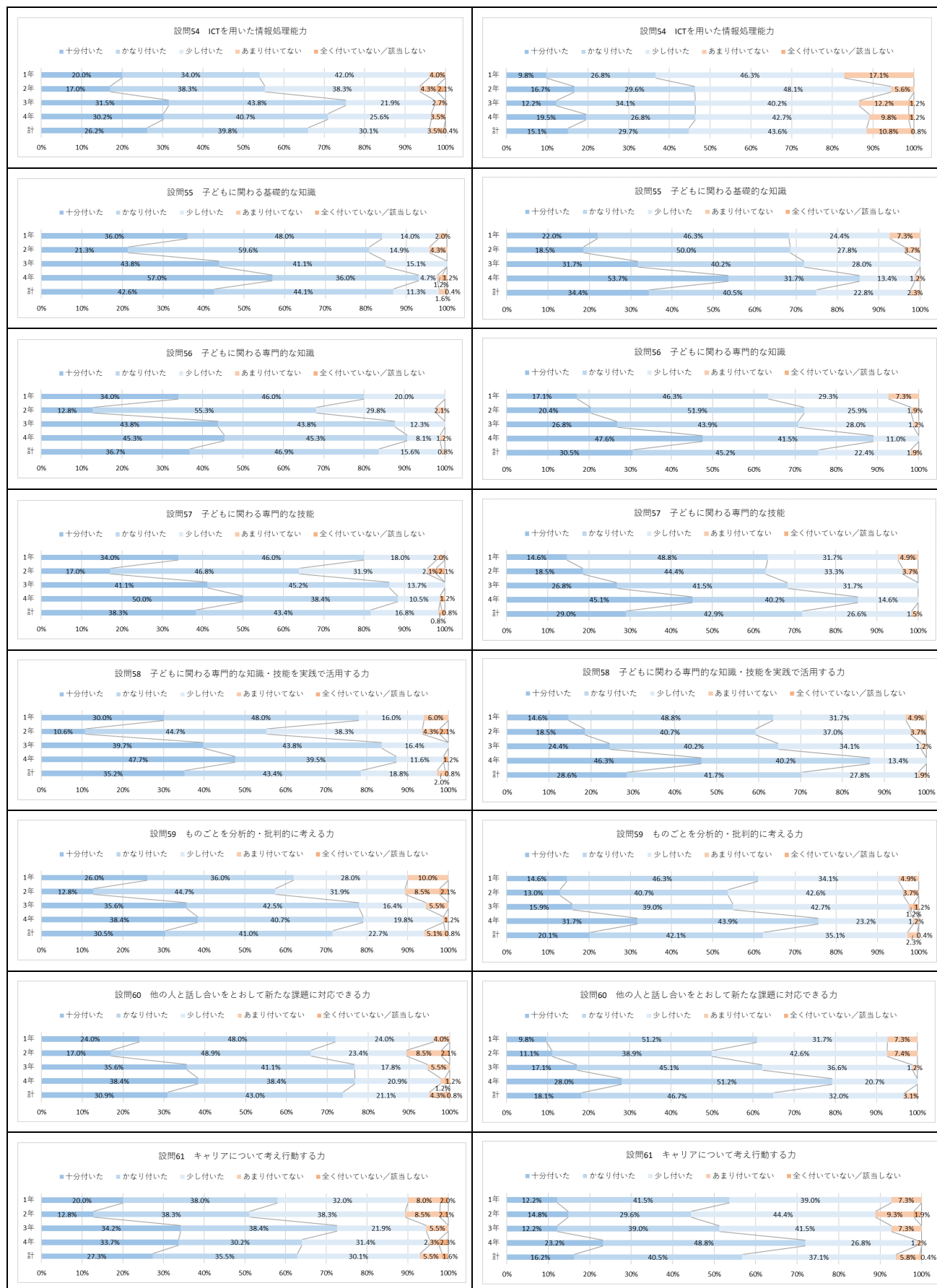
4年生は教育実習や教員採用試験など、進路に直結する重要な課題を抱える時期である。本学科では、3年次から自治体別の少人数グループを編成し、面接や小論文対策を含めた継続的な指導を実施している。

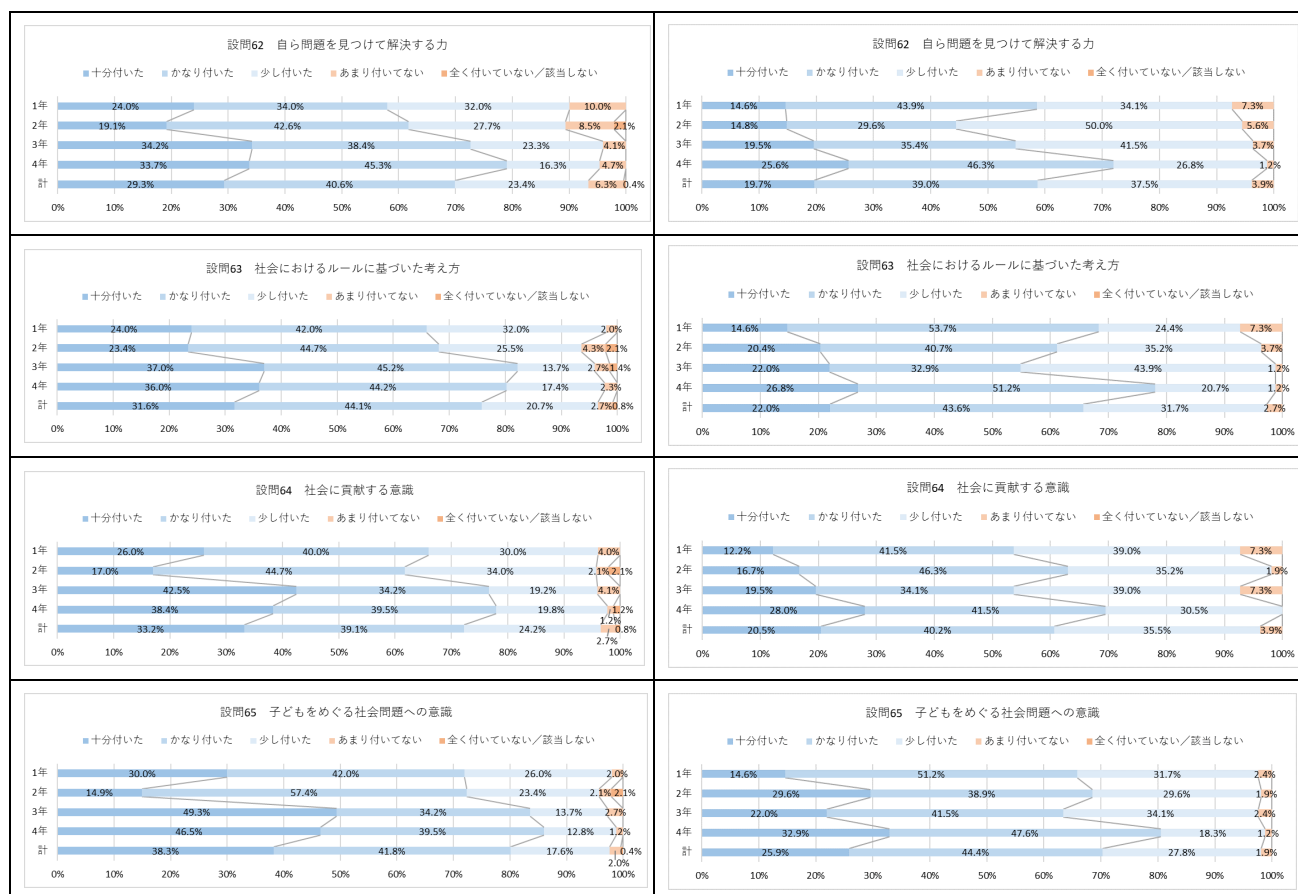
このように、教員が適切な距離感を保ちつつ計画的・継続的に関わる体制が整っていることにより、学生が相談しやすい環境が確保されている。その結果として、「教職員」を相談相手とする学生の割合が大学全体より高くなっていると考えられる。

4. 成長実感度について

項目8（設問51～65）では、「大学入学時と比較した能力の成長実感」を問うている。回答は「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」「あまり付いていない」「全く付いていない／該当しない」の5件法である。







保育・幼稚園コースでは、設問 54「ICT を用いた情報処理能力」と設問 61「キャリアについて考え行動する力」を除き、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した割合が、全学年合計で 9 割を上回っている。このことから、多くの学生が成長を実感していることがうかがえる。

また、「十分付いた」「かなり付いた」と回答した割合は、すべての設問において 4 年生が最も高く、学年が上がるにつれて増加する傾向が見られる。これは、カリキュラムを通して能力の向上を実感する学生が増加していることを示唆している。

一方、小学校・特別支援コースにおいては、設問 59「分析的・批判的思考力」、設問 60「協働による課題対応力」、設問 61「キャリア形成能力」、設問 62「問題発見・解決能力」において、2 年生の肯定的回答が 9 割をわずかに下回ったものの、それ以外の設問ではすべての学年で 9 割を上回っている。

また、設問 47「ICT 活用能力」と設問 54「キャリア形成能力」を除き、全体として 9 割以上の学生が成長を実感している。

さらに学年別比較では、設問 61 および設問 63 を除き、4 年生の割合が最も高く、保育・幼稚園コースと同様に学年の進行に伴って肯定的回答が増加する傾向が確認された。

これらの結果から、本学科・コースのカリキュラムは、学生の資質・能力の向上に寄与していると評価できる。

2025 年度 観光経営学科 学修行動と学修成果の調査結果分析

観光経営学科では、7 項目（Ⅰ．学修行動と学生生活について 7 項目 50 問、Ⅱ．学修成果についてについて 1 項目 16 問）の選択形式、学修行動に関するアンケート調査を実施し、分析を行った。今後の学修指導および学生の満足度を向上させるために有益であろう分析結果に絞って以下の通りまとめる。

1. 調査項目について

観光経営学科では、1 年生～4 年生共通で下記の項目について調査を実施した。

Ⅰ．学修行動と学生生活について

1. 本学の「目標とする力」についての調査（設問数 6/ Q1～Q6）
2. 授業に関連した調査（設問数 7/ Q7～Q13）
3. 授業期間中の一日当たりの行動調査（設問数 5/ Q14～Q18）
4. 授業期間中の学内外での行動調査（設問数 4/ Q19～Q22）
5. 大学の教育内容・設備・学修支援の満足度についての調査（設問数 13/ Q23～Q35）
6. 現時点での不安や悩みに関する調査（設問数 9/ Q36～Q44）
7. デジタルツールの利用に関する調査（設問数 6/ Q45～Q50）

Ⅱ．学修成果について

大学入学時以降の能力向上についての調査（設問数 16/ Q51～Q66）

2. 項目別調査結果について

(1) 本学の「目標とする力」についての調査（項目Ⅰ-1）

各項目によって多少のばらつきが見られ、人間愛（設問 1）、他者との協働（設問 2）自立（設問 3）は各学年とも「十分身についた」「やや身についた」の合計は概ね 95%程度となった一方、創造的は問題解決力（設問 4）、専門性（設問 5）、世界の持続・発展に尽くす力（設問 6）は 80%代にとどまっていることから、今後、実践的な能力に力点を置いた指導が必要だと考えられる。

また、「十分身についた」の回答割合について、今年度は 4 年生が大学全体平均を大きく超えている一方で、1～3 学年は全体平均より低い傾向にあり、学年ごとの特性についても考慮する必要があると考えられる。

(2) 授業に関連した調査結果（項目Ⅰ-2/3/4）

設問 7 の「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」に関しては、「頻繁にした」が各学年とも大学全体平均より 5～10%低い状態であり、授業の予復習を促す工夫が必要だと考えられる。

またオフィスアワーの利用（設問 9）については高学年ほど「頻繁にした」「時々した」の回答が高い傾向として表れており、学生と教員との接触時間＝学生との積極的な関わり が結果に結びついていると考えられる。

メディアライブラリー利用（設問 12）、学内自習教室（設問 13）においては「頻繁にした」の回答が大学全体平均と比べ大きく下回る傾向にあり、「時々した」と合わせても大学平均を下回る傾向にある。設問 14 以降の結果からも大学平均に比較して授業外の学修時間は総体的に低く、学内施設利用をふくめた自主学習取組を促す工夫が必要であると考えられる。

授業欠席数（設問 19）についても、大学平均と比較し、約 50%の学生は 4 回ないし 5 回の欠席という結果になっており、単位取得のために必要な出席回数ギリギリの傾向が際立っている。欠席理由が明らかでないもので単純には結論付けられないものの、欠席回数を抑制するための授業方法について検討する必要があると考えられ、カリキュラム検討と合わせた課題として捉えたい。

(3) 大学の教育内容・設備・学修支援の満足度についての調査結果（項目Ⅰ-5）

本学科の学生において、設問 35「大学全体を総合的に判断して」のプラス評価は高く、設問 24「所属する学科・コースのカリキュラム」、設問 25「学生生活」、設問 26「講義教室の設備（空調や照明を含む）」、設問 28「メディアライブラリー（図書館）の設備や学修環境」に対する満足度は高い傾向にある。最も重要といえる設問 23「授業の内容」の評価は「とても満足」+「やや満足」の合計が全学年平均で約 93%だったものの、「とても満足」は 31%にとどまっており、講義内容については満足度を高めるための検証が必要であると考えられる。前年度の 43.1%からの改善はみられるものの、引き続き向上のための一層の努力が必要となる。

なお、設問 32「学科コースの教員による指導・相談」では「とても満足」が大学平均を大きく超え、全学年平均で 46.3%、4 年生に限れば 63.5%という高い評価となっており、学生と教員との良好な関係性が確認された。

(4) 現在の不安や悩みに関する調査結果（項目Ⅰ-6）

設問 36「授業の内容についていけない」と感じる学生は改善傾向にあり、「大いにある」「少しある」の合計は、1 年生で 21.3%と大学平均以下であり、学年があがるごとにマイナス評価は減少し、4 年生でのマイナス評価は 1%程度となっており、学生の理解度を維持するための対応ができていると考えられる。

設問 37「卒業後にやりたいことがみつからない」、設問 38「希望の就職先や進学先への不安」については、マイナス評価が大学平均を下回る傾向にあり、特に 38 は 3 年生において不安を抱える学生が約 70%に及ぶことから、就活関連のサポートでの更なる対応が必要と考えられる。

設問 39「経済的に勉強を続けることが難しい」と答えた 1 年生の比率が 22.7%（前年 23%）と大学平均と比較して依然高い状態にある。具体的にどのような経済的不安を抱えているのかについて、丁寧に把握する必要があると考えられる。

設問 42「身体面の不安」、設問 43「精神面の不安」については大学平均を超える状態ではないものの、2 年生、3 年生でのマイナス評価が高い傾向にあり、大学生活の慣れとの因果関係について検証が必要である。

(5) 大学入学時と比べた「能力」向上についての調査（項目Ⅱ）

4 年生ではいずれの能力もプラス評価が際立って高い傾向にあり、就活に向けた自己変革、学修が数字に表れているものと考えられ、社会に出る準備を意識づけることが能力を養うカギになっていると想像される。

設問 52「本・論文・資料などを読む力」は 1～3 年生においては「十分ついた」+「かなり付いた」の合計が 50%に達せず、設問 59「語学力」についても「十分ついた」+「かなり付いた」が 1～3 年生では 50%を下回る状態にあり、国際化が進む観光業界において語学力は必須要件であることに鑑み、読解力、語学力の向上を学科全体の課題として捉え、対応策を検討する必要がある。

語学力が重要となる観光経営学科としては強化・改善の必要性が認識される。

設問 63「観光経営に関する専門知識」、設問 64「産業人として実践する準備」、では学年が上がるにつれて「十分ついた」「かなり付いた」のプラス評価が高くなる傾向にあり、学科カリキュラムが観光産業人材の育成に一定寄与できていると考えられる。

設問 65「情報受信力」と設問 66「情報発信力」は、1～3 年生と 4 年生との数値の開きが表れており、低学年段階での情報の受信・発信に関わる学修が必要である考えらる。

以 上